私たちのまち
さがみはら まちだ。
今まで知らなかった大学や地域の情報が盛りだくさん。
この「情報紙」は大学生が企画・取材・編集しました。

さがまち

大学と地域の連携によるまちづくり情報紙

発行
2007年3月 NO.2
相模原・町田大学地域連携方策研究会
(相模原・町田大学地域コンソーシアム)
http://www.jouhou.org
E-mail:info@jouhou.org
携帯からもアクセスOK!!

電波に乗ってみんなに届け！ 僕らの思い

～学生たちの手作り番組 エフエムさがみ「インターンズラジオ」～

「大学生のネットワーク！インターンズラジオ。ハーイ！皆さん、こんにちは。エフエムさがみ『インターンズラジオ』にようこそ。今日のお相手は麻布大学の加藤ひとみと山下夏葉、法政大学の岡田浩明、高井翔太朗、岡崎望、そして女子美術大学の野尻喜美子です。どうぞよろしくお願いします」毎週火曜日の午後10時30分になると、元気な学生たちが担当しているちょっと変わったトーク番組が、地元コミュニティーFM放送局「エフエムさがみ」(83.9MHz)から流れてきます。

今、学生たちに人気の番組で、地元で開催されるイベントや学生たちの交流情報、さらには学生ならではのレアな情報が次々に紹介されています。

この「インターンズラジオ」は、「エフエムさがみ」でインターンシップを経験した学生たちに、企画から取材、機器操作、そしてディスクジョッキーまでのすべてを任せるという新しい形の番組です。そして今、放送を担当しているのは、インターンシップの2期生です。この「インターンズラジオ」が、同年12月26日の午前11時から、特別番組「インターンズラジオ・忘年会」として生放送されました。

▲すべてが学生による手作りの番組「インターンズラジオ」

インターンズラジオ忘年会で1年を振り返る

「インターンズラジオ・忘年会」では、初代インターンシップの学生たちが大抜擢され、3時間にわたり生放送をしました。そしてFM局での経験を振り返って、「自分の話すことにすごく気をつかうようになった。仕事をすることの本当の意味がわかったような気がする」(桜美林大学 渡辺周一郎さん)「単なるアルバイトではなく、FM局の一員として働けたことが今後の財産です」(玉川大学 澤田沙織さん)「就職活動の際にFM局での体験が自信につながった」(玉川大学 山口紫乃さん)と語ってくれました。

学生の街ならではの番組づくり

「相模原・町田はとても学生の多い街です。そういう意味では学生の感性がダイレクトに発信できるこの番組は当社にとっても貴重な番組になっています」(エフエムさがみ 原社長)。FM局側としても地域の学生という新鮮な人材が加わることにより、魅力のある番組づくりが可能になったようです。

「フォトシティさがみはら 子ども写真教室」は元気がいっぱい！

～相模女子大学・女子美術大学の学生がプロモーションビデオを競演～

相模原市では、市民による総合写真祭「フォトシティさがみはら」を2001年(平成13年)から毎年開催していますが、その一環として、子どもたちを対象に「子ども写真教室」を同時開催しています。この「子ども写真教室」の様子をビデオに収め、「フォトシティさがみはら 子ども写真教室」プロモーションビデオを制作し、相模原市橋本駅のミウィ橋本のインナーガーデンで上映するという試みが2005年(平成17年)から実施されています。この試みはフォトシティさがみはら実行委員会と相模原・町田大学地域連携方策研究会の共同企画により実施されているもので、2006年(平成18年)は相模女子大学と女子美術大学の学生たちが作品を作り上げました。舞台となった学校は相模原市立旭小学校と大野小学校で、学生たちは大学で学習・研究してきたノウハウを活かして最高の作品を作り上げていました。

それぞれの個性が光った撮影・編集作業

この「フォトシティさがみはら 子ども写真教室」は小学生たちにとっても最高の体験機会ですが、それを題材にプロモーションビデオを制作する大学生にとっても、大学での学習の成果を多くの皆さんに披露できるまたとない機会です。撮影時にはそれぞれ監督、撮影といった役割分担を決め、事前に自分たちで考えた撮影を行ない、まさに映画制作のような真剣さが漂っていました。撮影後も何度も打ち合わせを行い、大学の授業ではめったに見かけないパワーを注いで作品を完成させていたそうです。

▲脚立持参で参加した学生

自分たちの作品が上映される快感

完成した作品をそれぞれに持ち寄り、関係者を前に試写する学生の姿は真剣そのもの。大学の授業では得られない緊張感を学生たちは味わっていました。それから何度か編集をし直した後、ついに上映の機会が訪れました。学生たちにとっては自分たちの感性を披露する最高の舞台です。緊張感の中にも自分たちの作品を多くの皆さんに見ていただけるという快感を味わっていました。

▲カメラ操作の学習をする学生

▲カメラアングルに徹底してこだわる学生

学生には実りのある社会体験を、そして地域には若い感性や活力を活かしてさらに活動が発展できるよう、今後も大学と地域の連携・協働によるさまざまな取り組みを進めていきます。

LINE UP

挑戦する大学生の奮闘記 …… p1
エフエムさがみ「インターンズラジオ」
「フォトシティさがみはら 子ども写真教室」プロモーション制作
地域でがんばるボランティア …… p2
「障がい児スポーツ教室」支援活動
「こもれびの森」を守る森林ボランティア
Let's Walk☆商店街☆ …… p3
淵野辺駅「にこにこ星ふちのべ」
玉川学園前駅「玉川学園商店会」
牛とともに今を走る …… p4
都市近郊での酪農を支える熱き思い
ぶらり大学探訪 …… p4
女子美術大学美術館(JAM)
東京家政学院生活文化博物館
@CAFE SAGAMACHI …… p5
本日のお客様～三浦しをんさん～
さがまち情報スクランブル …… p6～p7
相模原・町田の耳寄り情報を一挙掲載
SIC アントレ・インターンシップ …… p7
「自立実践型インターンシップ」さがみはら産業創造センター
相模原・町田大学地域連携方策研究会プロジェクト報告 …… p8

地域でがんばる ボランティア

昨年で30周年を迎えた「障がい児スポーツ教室」。荒れていく森林をよみがえらせようとする「NPO法人　相模原こもれび」。これらのボランティア活動の背景には地域の人々や大学生の協力があります。私たち学生記者が実際にそれらのボランティアを体験しながら取材してきました。（文：青山学院大学 淺見友香・武藏由佳　Photo：多摩美術大学 大塚晃生・堀之内毅）

・障がい児スポーツ教室・

「障がい児スポーツ教室」は、障がい児の健康増進・社会との交流を目的とした町田市営の体育館やプールで行われているスポーツ教室で、障がい児とその保護者・指導員の人々が主体となって運営されています。その一つ、毎週土曜日の午後に行われるサン旭体育館での「スポーツ教室」には、子どもたちの元気な姿がありました。

みんなで支え続けた30年間

「障がい児スポーツ教室」は、1976年（昭和51年）10月に保護者の強い要望により、小学校5年生以上の約30人の参加者、2人のボランティア指導員（都立町田養護学校教員）で始まりました。

設立以来この教室にかかわってこられた市川健一先生（現在は都立町田養護学校長）にその活動についてお聞きしました。「常に保護者・指導員・大学生・市役所が支え合い、地域生活の一部としてスポーツ教室を運営しています。さまざまな困難を乗り越えて発展してこられたのも、みんなの力が合わさったから。子どもたちのために一心不乱に模索しながらやっています」

▲市川健一先生

1993年（平成5年）からは玉川大学水泳部指導班の学生のみなさんがボランティアとして参加し始めました。そして発足当初から、市民主体の活動を市役所が支援し、参加者や指導員の募集、また備品の購入なども行ってきました。このように「スポーツ教室」は保護者・指導員・大学生のみなさん、それに行政の支援によって支えられているのです。現在では、体育館とプールを合わせて100人以上の障がい児が登録しており、指導員も約50人にまで増え、その中には専門的知識を持った人もいて、それぞれ役割を分担して教室が運営されています。

▲細いパイプを渡る子どもたち

体を動かす喜び

参加している子どもたちの障がいはさまざまで、車椅子でみんなと一緒にゲームなどに参加している子もいました。子どもたちはとても元気で、走り回ったりトランポリンやダンスなどをして、運動することの楽しさや喜びを全身で感じているようでした。

「障がい児スポーツ教室」は運動能力の向上を目指すことが目的ではないのですが、ただみんなで楽しく運動するだけでもありません。その子のペースに合わせて注意するべき事は何でも教えています。その日の目標を決め、始めと終わりには挨拶・整列・掃除をします。仲間と共に汗を流し体を動かす喜びを味わってもらうことを大切にしています。

大学生の参加

市川先生は学生に積極的に「スポーツ教室」への参加を呼びかけており、現在、障がい児が通う「すみれ教室プール」でも玉川大学水泳部指導班の学生がボランティアで水泳の指導を行っています。

旭町体育館でボランティア活動をしている新行内瞳さん（玉川大学3年）と黒須美央さん（玉川大学2年）にインタビューさせていただきました。二人は子どもや教育に関心があり、「社会勉強になるし、何よりもみんなと一緒に楽しく遊べるのが1番！」と笑顔で話してくれました。

▲玉川大学の黒須美央さんと新行内瞳さん

指導員をされている鈴木睦美さん（元中学校教諭）に参加理由をうかがうと、「子どもが大好きで、逆に子どもたちから元気をもらっている」と話してくれました。

保護者の高崎登美子さんは「このスポーツ教室は、子どもにとっても、親にとっても貴重な交流の場なので、これからもこのまま続けて欲しい」とおっしゃっていました。

▲子どもたちとの楽しいゲーム遊び

取材に行ったときは、子どもたちとどのように接すれば良いのかわからず少し戸惑いましたが、しばらくすると、興味を持った子どもたちが近づいてきて、仲良くなろうとしてくれたので、すごくうれしかったです。一緒に運動場の周りを走ったり、音楽に合わせて体操をしたり、運動を楽しむ子どもたちの生き生きとした様子に元気をいっぱいもらいました。

・森林ボランティア 相模原こもれび・

相模原市麻溝台・大野台・大沼地区に面積73㌶（東京ドーム約15個分！）のクヌギ、コナラなど広葉樹の多い雑木林があり、近郊緑地特別保全地区に指定されて「木もれびの森」と呼ばれているところがあります。この森の再生・保全活動をしているのが「NPO法人　相模原こもれび」です。大野台地区の森の再生に奮闘する市民のみなさんのボランティア活動を体験取材してきました。

江戸時代から家庭の貴重な燃料源であったまき・炭の供給をするために維持されていた「こもれびの森」は、昭和30年代以降、燃料の主流が化石燃料に移り変わったために、森はしばらく放置されていました。

森の再生を目指して

「このままの状態で放っておいてはいけない！」という市民の声を背景に相模原市役所は、2001年（平成13年）に森林ボランティアを募集しました。その活動を継続してより多くの市民のみなさんに参加してもらおうと、2004年（平成16年）に市民が集まり「森林ボランティア　相模原こもれび」が誕生し、2006年（平成18年）11月20日にNPO法人化されました。「相模原こもれび」は、森林全体に光を行き渡らせ木の生育を促すため、間伐や下草刈りをしています。また、植生調査をしたり、伐採した木でベンチを作ったり、森の再生を目指して月2～3回ほど活動しています。

▼木を伐採しています。二人にとって初めての体験です

私たちが体験取材させていただいた1月21日（日）の活動テーマは「キコリ体験とシイタケホダ木ゲット」でした。シイタケのホダ木を作るために、のこぎりで樹齢10～20年のコナラの木を伐採し、その木を適当な長さで切り適度に乾燥させます。その後、シイタケ菌を植え付けるという作業を行います。キコリ体験でのこぎりを使って木を切り倒すときの注意など丁寧に教えてくださったり、作業後にみんなで輪になって豚汁を食べながら話したり、すごく親しみやすい現場でした。この豚汁に入っていたシイタケも以前ボランティアで作ったホダ木から採取されたもので、とてもおいしかったです。

▲伐採した木を50㌢づつ切って整理します

▼高橋孝子代表

森が荒れている

ボランティアに参加している人のほとんどは、それまでチェーンソーなどの機材を使った経験がなかったそうです。ここに集まる人は、技術や経験に関係なく「こもれびの森」を愛する地域の人々です。「こもれびの森」に対する思いと情熱はさまざまですが、「森を守りたい」という同じ志を共有した仲間が役割分担をして活動しています。

代表の高橋孝子さんは「こもれびの森を守り、明るくキレイな森にしたい！　もっとみんなに参加して欲しい！」と言っていました。

▲森の再生のために密生した木を切り太陽の光が地面に当たるようにします

次世代を担う子どもたちにも「こもれびの森」を知ってもらうため、ジュニアボランティア活動の支援も行っています。「こもれびの森」はとても広大な森林なので、保全するためにはより多くの人の協力が必要です。地域の人々と学生がその地域の事を考えながら、普段の生活では体験できないような作業を通してかかわり合える貴重な時間として是非一度参加してみてはいかがでしょうか？

「NPO法人 相模原こもれび」
【連絡先】090-4629-4843
URL：http://komorebi.bine.jp

Let's Walk☆商店街☆

大学と商店会との連携でまちづくり

地域でのお祭りや人々の集いといったものが、各地で減少しつつあり、商店街から「活気」が徐々に消えています。しかし、商店街では新たなまちづくりとして商店会と大学・大学生との連携による活動が始まっています。その地域の環境に合わせたユニークなまちづくりを取材してきました。（文：青山学院大学　武蔵由佳　和光大学 渡辺久美子　玉川大学 大久保理歌　Photo：青山学院大学 淺見友香）

★にこにこ星ふちのべ★

毎年8月になるとJR横浜線淵野辺駅の駅前が「銀河まつり」でにぎわいます。そこには老若男女が集い、模擬店を出したりステージでの催し物もあります。

一度聞いたら耳に残る、「にこにこ星ふちのべ」。この商店街名は、21年前に行われたまちづくりのテーマ「銀河をかけるまちFUCHINOBE」に由来します。横浜線の線路を中心に広がるこの街並みが、夏の星空を思わせたことからこのようなテーマになりました。そのため、駅の周辺にある各通りには、例えば"ヘラクレス座通り"というように、星座の名前がつけられています。これらの通りの商店会がひとつに合わさり「にこにこ星ふちのべ協同組合」が設立されました。

・・・変化の時

今から4年前、淵野辺地区では青山学院大学のキャンパス移転や桜美林大学PFCの建設を背景に、2万人の学生が乗り降りする街に姿を変えました。その当時、麻布大学の学長に就任された政岡俊夫先生は、淵野辺を"第二のふるさと"と呼び、その思いから「今までは大学と地域がかけ離れていた。新しい大学が増えたからこそ、地域をより身近なものにしよう」。学長のこの思いが3大学と地域の連携を強く促したのです。

これを機に、それまでは自治会や商店会で運営され

▲銀河まつりで奮闘中の麻布大生（写真提供：にこにこ星ふちのべ）

▲銀河まつりでにぎわう淵野辺駅前（写真提供：にこにこ星ふちのべ）

ていた銀河まつりに、大学生も参加するようになりました。大学生が模擬店での仕入れから販売まで経験してみたり、ステージでダンスなどを発表してみたり。中には、このお祭りを通じて自身の取り組む課題研究を行う学生も。学生の参加が、活気や発想など、今までにはなかったものを商店街にもたらしたのです。

学生にとっても貴重な社会勉強の機会になっています。「先生たちとは違った人たちと交流ができて面白い」（麻布大学　石濱由里恵さん）、「出店の運営を通じて商売について学び、それに対して興味がわいた。最後の売上競争も楽しかった」（青山学院大学　井野義也さん）。「銀河まつりへの参加で知り合いになった店主が大盛りサービスしてくれる！帰り際には、また来てね、と言ってくれてうれしいです」（麻布大学 久保山智史さん）。まさに学生にとっても第二のふるさとになったようです。ただ、大学移転時期の違いもあって、現在のところ、どうしても麻布大学の学生の参加が多いそうで、青山学院大学、桜美林大学の学生の参加を大いに期待しているそうです。「駅のそばに大学がないのでどうしても通過駅になってしまいがちですが、いつか自分も商店街で活動してみたいと思っています」（桜美林大学 佐々木健太朗さん）。

▲銀河まつりに参加された学生のみなさん

学生の力への期待

▲藤原長俊理事長

にこにこ星ふちのべ協同組合理事長の藤原長俊さんは、「学生たちの自主性に対して、私たちは積極的にバックアップします。例えば商売や仕入れの方法とか、資金とか人脈とかの面とかで。何でも相談してください」。「淵野辺駅前にある広いデッキはなぜ造られたか知ってますか。あそこはステージが設置できて、地域の人々や学生がここをいつでも利用できるようにと考えて造ったんです。電光掲示板だって言ってくれればサークルだの何だの、情報を無料で流すことができます。何でも使ってください」

このように、この街には学生たちの主体的な行動を支える環境が整備されています。最後に「学生に一番望むことは何ですか？」との問いに藤原理事長は「とにかくまちづくりに入ってきてほしい。そして、日常的にこの街を利用してほしい」と言っていました。

現在、相模原市には大学が9校あります。だからこそできる「地域と大学の連携」。その中の一つである「にこにこ星ふちのべ」の一番の課題は、学生の参加意欲なのかもしれません。実家から通う人、一人暮らしをしている人と生活様式はさまざまです。だからこそ、友人と共に"第二のふるさと"と呼べるようなまちづくりに取り組み、挑戦していってほしいと思います。地域の人たちはそんな学生たちを、暖かく迎え入れてくれるはずです。

★玉川学園商店会★

2006年（平成18年）12月、小田急線玉川学園前駅の北口にある玉川学園商店街をクリスマスイルミネーションが彩りました。地元商店会と大学・大学生が連携して初めて行った一大イベントでした。玉川大学の学生と玉川学園商店会、町田商工会議所の連携・協働で、玉川学園商店街のクリスマスイルミネーションが行われました。

初めての商店会と大学との連携

玉川学園キャンパスのクリスマスイルミネーションといえば全国的にも有名で、遠方から足を運ぶ人もいるぐらい。そこで、大学だけではなく、街全体もイルミネーションで盛り上げていけば地域の活性化が行えるのではないかと、玉川学園商店会（高橋靖昭会長）が企画しました。この企画に連携協力したのが玉川大学工学部特別課題研究「環境とリサイクル」グループ（代表 大久保英敏教授）。装飾をすることで地域活性化をしよう、家庭でいらなくなったイルミネーションを使用することでリサイクルも行おう、といった当初の商店会の企画にふくらみを持たせました。イルミネーションは、商店街の街灯や路上、それにイベント用に設置されたもみの木のツリーに施されました。町田市内の企業の協力を得てツリーには発光ダイオードを飾り、工学部との連携ということもあって、自転車発電による点灯式も行われました。これは何とも学生らしい発想で、とてもユニーク。「前日に必死になって用意しました」と、今では学生たちの楽しい思い出になっています。

▲モミの木に発光ダイオードを巻き付ける（写真提供：玉川大学）

▼完成して点灯されたイルミネーション

共同作業の中から得たもの

2006年（平成18年）7月、学生と商店会青年部と共同でイルミネーション作りが始まりました。しかしなかなか全員が集まることができず、月2回の会議が進捗報告や行動計画を確認し歩調を合わせる貴重な接点となっていました。そんな時、プロジェクトに参加していた学生から「このままでは間に合わない。何とかしなくては」という声が出始め、初めの決意に立ち返りプロジェクトをやり遂げることができたと話してくれました。「飾ったものを見てくれて本当にうれしかった」（工学部　芦沢清教さん）。「皆が一体となってイルミネーションを作ったことで、商店会を身近に感じるようになった。お店の家族構成とかまで分かったりして（笑）」（同学部 イルミネーショングループリーダー 木村仕博さん）。このように、学生が得たものは大きかったようです。

▲玉川大学の芦沢さんと木村さんに取材中

▲渡辺誠一部長

一緒に活動をしてきた商店会青年部の構成員はとても若く、平均年齢が25歳ぐらいとか。青年部部長の渡辺誠一さんは、「これからも商店会と学生とで事業の連携を目指したい。今回このように連携できたことで、まずは玉川学園商店会の認知度を上げることができた」と学生たちとの連携を高く評価していました。

▲川崎徳与諸副部長

連携を継続・発展させていきたい

夏祭り・クリスマスイルミネーションや街角アートギャラリーと、年間を通じて楽しめるイベントが多い玉川学園商店会。「イベントへの参加はもちろん、学生の方から『あんなことやりたい、こんなことやりたい』って言ってきてほしい」（渡辺さん）、「提供できるものは何でも提供するからどんどん積極的に言ってきてよ」（川崎徳与諸青年部副部長）「青年部と学生たちとの連携をこれからも応援していきますよ」（高橋靖昭商店会長）商店会の受け入れ態勢は万全です。

昨年から始まった大学・学生たちと商店会との連携は、新たな展開を予感させてくれました。

牛とともに今を走る

～酪農に対する熱き思い～

超高層ビルなどが出現して都市化が進む相模原市・町田市。昭和30年頃には両市の酪農家軒数が千数百軒を数えましたが、今では相模原市で19軒、町田市で12軒にまで減っています。酪農を続けるのにはあまりにも厳しい環境の中でかたくなに酪農に情熱を燃やす人々がいます。相模原市大島にある“北島牧場”の3代目、北島隆さんに酪農への熱い思いを取材してきました。（文・Photo：玉川大学 大久保理歌　青山学院大学 今崎宏美）

小学生の決意が父親を動かした

酪農家を継ごうと北島隆さんが思ったきっかけは、NHK総合テレビの「明るい農村」という番組に北島さん一家が出演したこと。北島さんは「この番組で家族と一緒に酪農の仕事を紹介した時の楽しい思い出が今でも印象深く残っている」と語っていました。これがもとで、当時小学校3年生だった北島さんは、お父さんに「酪農を継ぎたい！」と宣言しました。その頃の相模原市・町田市は工場やビルが次々と建設され、野原にどんどん住宅が建てられているような状況でした。酪農をやめていく人が多い中で、息子に言われたこの一言が、お父さんにとってはうれしかったのでしょう。次の年には、隆さんのために牛舎を建ててくれました。その後は、専門の高校で酪農について学び、宣言どおり酪農家になりました。

俺は牛飼いのプロだが商売は素人

▲北島隆さん

しかし、実際に酪農の仕事を始めてみると、予想をはるかに超えた苦労の連続でした。初めはいくら大事に世話をしても牛が病気になったり、死んでしまったりと失敗することも多く、生き物を育てる難しさを痛感する日々でした。むなしさと共に不器用な自分に嫌気が差し、酪農の仕事が嫌いになったりもしたそうです。

また、法令で牛からしぼったミルクは100%をメーカーと取引するか自分で使用するかの二者択一だったため、メーカーを通さない自分たちだけのミルクも売りたい、という北島さんの願いも叶わなかったそうです。7年前にその法令が改正されたことで、20%のミルクを自分たちの手で販売できるようになりました。やっとチャンスが訪れました。“自分たちが生産した牛乳を直接消費者に届けたい”この夢を実現しようと北島さんは酪農家6人と一緒に町田市相原町に牛乳を製造する「みるく工房ピュア」とジェラートなどを販売する「あいす工房ラッテ」を設立しました。製造・加工・販売・運搬を一貫して行うことで、自分たちがしぼったミルクを、おいしさ・栄養をそのままに地域の皆さんに提供できるようになりました。

やっぱり牛が好き

酪農は、生き物を育てる仕事のため、365日休めません。牛舎の掃除、牛の世話や健康管理など一日にやることはたくさんあります。ミルクは牛の乳から機械でしぼられ、そのままパイプを通って4℃に保たれる貯槽タンクで安全に保管されます。このように、搾乳や牛の飼やりが機械化されるなど、酪農業界は技術の進歩が速いため、その変化にも対応しています。牛の糞尿も自動化された処理機にかけられ肥料にするなど、環境にも配慮しています。

こんなに大変なことが多いのに、「やっぱり牛が好き」と言う北島さん。「酪農はやりがいがあり、家族みんなでやれる仕事。自分が育てた牛が他の酪農家へお嫁に行ったり、牛の品評会で良い評価をもらったときの喜びは最高です」また、町田市や相模原市の仲間の他にも全国各地に酪農仲間がいます。酪農について語ったり、情報を交換したりして、ともに支えあっています。

地域との交流

北島牧場は近隣の学校とも結びつきがあります。北島さんは、牧場見学を積極的に受け入れたり、授業のために小学校へ牛を連れて行ったりしています。2006年（平成18年）11月29日には、相模原市内の小学生が北島さんの牧場へ見学に来ました。牧場で牛や酪農について学んだ後、「あいす工房ラッテ」でクリスマスツリーを見ながら、しぼりたてのミルクで作ったアイスを口いっぱいにほうばっていたそうです。「子どもたちに、牛は臭くないし、どこにでもいる生き物ということを知ってもらいたい。そして、この子たちが大人になった時、少しでもこの体験のことを思い出して、酪農のよき理解者になってもらいたい」と語る北島さん。これらの交流を通して、都市近郊での酪農存続につながればという思いも込められています。

大学との連携

毎年クリスマス時期になると、「みるく工房ピュア」と「あいす工房ラッテ」では「みるく聖夜」と命名したイベントが行われています。昨年は、東京造形大学の学生の皆さんが造ってくれた高さ10㍍のクリスマスツリーが目玉でした。3万球の電飾によるイルミネーションがとてもきれいでした。

今の仕事ができるようになるまでに、失敗やさまざまな経験をして、たくさんの苦労を乗り越えてきたからこそ、本当の意味で酪農が好きになり、情熱を持って仕事ができるのだと思いました。雪が降りしきる中でのインタビューでしたが、北島さんの酪農に対する熱い思いで寒さも忘れるくらいでした。身近にこういう酪農家の方々がいるから、私たちも毎日、おいしい牛乳やアイスを安心して食べることができます。私は、これから先、家で牛乳を飲むたびに北島さんのこと、この取材のことをきっと思い出すことでしょう。

ぶらり大学探訪

文 多摩美術大学 大塚晃生
Photo 女子美術大学 内田美香

女子美術大学美術館　女子美アートミュージアム（通称 JAM）

ガラス窓、透き通った光、広い芝生、周りには県立相模原公園や市立相模原麻溝公園があり、緑豊かな場所に、女子美術大学美術館はあります。訪問時には、緑・赤・黒の美しい色彩の日本画や、針のように細くて繊細に描かれた版画の作品などが飾られていました。

女子美術大学は1900年（明治33年）に創立。この美術館は2001年（平成13年）に創立100周年を記念して相模原キャンパス内に造られました。所蔵作品の展覧会だけでなく数多くの企画展示が行われています。

【ご利用案内】
■開館時間：午前10時～午後5時（入場は午後4時30分まで）
■休 館 日：火曜日（祝日は開館、翌水曜日閉館）、展示替期間
■入 館 料：企画展による
（学生、未就学児、65歳以上、身体障害者手帳等をお持ちの方は無料）

【お問い合わせ】
女子美アートミュージアム TEL：042-778-6801

東京家政学院 生活文化博物館

静かなたたずまいの中に昔懐かしい空気を感じさせているのが生活文化博物館です。東京家政学院大学には、家政研究所として1923年（大正12年）に創立して以来培われてきた生活文化研究の歴史があります。1990年（平成2年）に開設された博物館では、その研究のために集められた衣服・装身具をはじめ、民具、その他の各種民俗資料として貴重な歴史的遺物など、生活文化にかかわる実物資料が収集・保存されています。こうした資料を中心にして、春には収蔵品展、秋には大学祭に合わせた特別展（昨年は「中央アンデスの編む組む織る」）などが開催されています。また1月には日本文化学科・書道ゼミの学生による書道展も行われています。

【ご利用案内】
■大学の受付に博物館の見学希望を申し出てください。

【お問い合わせ】
東京家政学院生活文化博物館
TEL：042-782-9814

PHILOSOPHY @ CAFE SAGAMACHI

三浦しをん
小説家・随筆家、東京都出身。
早稲田大学第一文学部卒業。
出版社への就職活動中に入社試験の作文から執筆の才を見い出され、処女小説「格闘する者に○」（草思社刊）を出版。これに先立ちBoild Eggs Onlineのサイトにおいてウィークリー読者エッセイ「しをんのしおり」を連載。2006年（平成18年）に「まほろ駅前多田便利軒」（文藝春秋社刊）で第135回直木賞を受賞した。

本日のお客様　～三浦しをんさん～

やっぱり自分が何かしたいことに対して、熱意とかそれこそ愛情があるかどうかは、持続するための非常に大きなポイントだと思うんですね。つまり私の場合、本がすごく好き。

大きなビルやデパートがいっぱい

私は小学校5年生のとき、家族と町田市に引っ越して来たんです。以前住んでいた所は、駅前にしか商店街がないようなちっちゃな町だったので、最初はすごいところに来たなと思いました。

学生時代の町田市の思い出

とは言っても、中学高校は町田ではなかったので、その頃はあまり町田に詳しくありませんでした。JR横浜線を降りて町田駅周辺の本屋さんを毎日くまなく回って満足し、バスセンターからバスに乗っていました。

大学生時代の夢と将来に対する悩み、不安

大学では映画を作るサークルに入っていました。大学に入りたての頃の希望というか夢というか、職業として映画を作りたかったんです。そのサークルではずっと楽しくやっていましたが、映画を作るのは自分にはちょっと向いていないんだなとそこで気づきました。また、就職活動が始まる時期になると、将来どうやって食べていけばいいか、ということを考えるようになり、いったい自分はどうやって身を立てていけるかなとたまに考えていました。

考えてもみなかった職業

本や漫画がすごく好きで、学生時代は本屋でアルバイトをしていました。就職活動時代には、編集者になろうと出版社ばかり受けていました。どうせ働くなら自分の好きなことをしたいと思っていたので。でも自分が小説を書くとはまったく考えていませんでした。

自分が楽しく暮らせるためには

会社で堅実に働きたいと思う人は、そのために頑張ればいいと思うんです。でもやりたいことを持っていて、特に就職にこだわらなくてもいいやと思っている人は、むしろ学生時代を楽しんだほうがいいんじゃないかなと思います、会社に入っても本当にそこでやっていけるかなんて誰にも分からないので。でも、日本は新卒の時に会社とか役所とかに入らないとやりにくい社会なので、それなりの覚悟は必要だと思います。やりたいことを仕事にするのがいいってわけでもないので難しいですよね。とにかく自分の中で、会社に入るのか入らないのかをある程度決める必要があるんじゃないでしょうか。その後、軌道修正したいときにいつでもできる社会が一番いいと私は思うんですが。『絶対この会社に入らなきゃ』とか『絶対この仕事で身を立てていきたいんだ』という狭い考えじゃなくて、まずはなんとなくどっちにするかを決めて、自分が楽しく暮らしていくためにどうしたらいいかを考えるのが一番だと思います。

第135回直木賞受賞『まほろ駅前多田便利軒』

家族の住む東京

20年この街に住んでいますし、自分の住んでいる東京の郊外について一度書いてみたいとずっと思ってたんですね。東京郊外って、人間が住む場所としての首都圏というか。歌舞伎町24時とか、六本木ヒルズとかじゃない普通の暮らしがあるわけですよね。あと東京でもどこでも郊外の新興住宅地というのは家族が住む場所なので、そこにいろんな問題や人間ドラマがあるんじゃないかなと感じたので。それで自分がずっと住んでいる町田っぽい架空の東京の郊外の町を舞台にしようかなと思いました。

ゆりとごみから農場まで、すべてが町田市内で済む

町田市は、町の中ですごく完結していると思います。他のところに出て行かなくてもそれなりに何でもあって。あと昼間でもやけに駅前の人通りが多い。学生も居ますし、おじちゃんおばちゃんも居る。いろんな人が居るのが面白いです。新宿や丸ノ内などのオフィス街って、昼間はデパートも通りもあんまり人は歩いていないんです、みんなビルの中で仕事をしているから。でも町田はいつもやけに人が居る。なんだろうこれはってすごく不思議です。

まほろの思い出 喫茶店アポロン・まほろ印アイス

私は前から町田にある喫茶店「プリンス」が好きなんです。楽しい内装でゆったりできる喫茶店だなと思っています。本に登場する喫茶店「アポロン」のイメージはプリンスです。「まほろ印アイス」は、玉川大学農学部が飼育した牛から作ったアイスとか、町田の酪農家の方が何人か集まって牛を飼っているところを通りがかりに見たことがあって、『そうか、町田には牛がいるんだ、それでアイスを作っている人がいるんだ』と思ってまほろの特産品としました。

なんかいいなこういう自由人ぽいの

学生の頃から知っている便利屋のおじさんがいて、気が付くとどこかの家の庭木を切っていたりするんです。それで、面白い仕事があるんだ、なんかいいなこういうちょっと自由人ぽいの、と思っていました。便利屋さんは他人の家の中にどんどん入っていけるので、ちょうど私が書きたいテーマにその職業がぴったりかなと思ったんです。

何度しても変わらないのは愛情

やっぱり自分が何かしたいことに対して、熱意とか愛情があるかどうかは、持続するための非常に大きなポイントだと思うんですね。つまり私の場合、本がすごく好きなんです。そうすると自分でも、じゃあこんなに好きな本というものに自分も真剣に取り組もうじゃないかと思えるんです。もう一つは、ものの見方として、マイナス面を発信する人とプラス面を発信する人とに、おおまかに分けられると私は考えていて、私は結構褒めたたえる系なんです。発想の方法として、「あ～こういうやつってほんとうに嫌いだ」という思いを馬力にキャラクターを書く人と、「あ～こういう心って非常に美しくって好きだ」と思って書く人に、わりと分かれるような気がします。

自分が愛せるものから作り出したい

自分の中ではマイナスの感情が常に渦巻いているんですけど、あえて自分が愛せるものから何かを作りたいし、同時に何かを見てすぐマイナスの感情が渦巻く自分を止めるようにしたいと思ってます。大概そう思って見ると、いいところが絶対あるはずなんです。私にとっての創作って、そういう感じがします。

小説にあふれる愛情

この小説はそういうところがストレートに出ている話だと思うんですけど、確かに基本的にはそうですね、愛に満ちあふれています（笑）。そのほうがたぶん楽しいだろうと思ったんです。

私にとっての町田市

自分が住んでる街なので、結構好きですね。どこの街だってそうなんでしょうけど、この町田の駅前にはやけにみんなが集結していて「グワァ～」って常に訳の分からぬエネルギーを充満させてる感じがあって、私はとても好きです。同時になんかこう最先端のとがりぶりじゃない、静かでちょっと変わった泥っこい刺激があるところがいいですね。

憧れのしをんさんにインタビュー!!!取材中はやはり緊張したのか、スムーズに質問の言葉が出てこない。そんな私たちの解読困難な質問に、しをんさんは一つ一つ丁寧に答えてくださいました。学生時代や将来のことについての対話は、インタビューというよりもむしろOG訪問に近いものでした。全く想像もしていなかった職業に就いているしをんさん。自分の好きなものに注ぐ愛情が彼女を作家へと導いたのでしょう。おっとりした雰囲気の中に確固たる信念を持つしをんさんの答えには、学ぶことがたくさんありました。ありがとうございました。

（文：青山学院大学　今崎宏美　玉川大学　大久保理歌　Photo：多摩美術大学 大塚晃生）

大学と地域の連携によるまちづくり

相模原・町田大学地域連携方策研究会は、大学とNPO、企業、行政など地域を構成するさまざまな主体が連携を強化し、総合的に地域の活性化を図る仕組みを研究するため、大学と地域の連携・協働によるプロジェクトを実施しています。

【2006年度（平成18年度）に実施した主なプロジェクトを紹介します】

◆情報発信プロジェクトの実施

○研究会サイト「まなびとまちづくり」の運営

ホームページでは、相模原・町田を中心としたエリアの大学や加盟団体が実施する公開講座や広く市民の皆様が参加できるイベントなど、多彩な情報をリアルタイムに発信してきました。

▲研究会HPのトップページ

○情報紙「さがまち」の発行

実際の情報紙づくりを通じて、学生たちは印刷物制作の過程を学ぶことができました。大学と地域による多様な連携・協働を誘発し、地域づくりへの参加意欲を醸成するために、さまざまな思いを持って地域で活動している人や団体を紹介しました。

【参加大学】青山学院大学、相模女子大学、女子美術大学、玉川大学、多摩美術大学、和光大学

～玉川学園商店会青年部長 渡辺誠一氏～

在学中の学生が中心になり地域住民に向け情報を発信することは、今の若者たちの底力を見せる良い機会です。これからも若者を中心に地域の活性化に励んで欲しいと思います。そのために私たちもこれからも学生との交流を一層深めて、学生と商店会とで協力して地域の活性化に取り組んでいきたいと思います。

◆リーディングプロジェクトの実施

○エフエムさがみ「学生インターンシップ」

コミュニティFM局で3カ月間にわたり、アナウンスや番組づくりの基礎を学び、「インターンズラジオ」（毎週火曜日午後10時30分～11時）の中で実際に番組を制作・放送するという貴重な経験をしました。

【協力企業】（株）エフエムさがみ

【参加大学】麻布大学、桜美林大学、女子美術大学、玉川大学、法政大学

～桜美林大学キャリア開発センター 渡邊ちえ氏

番組制作の過程で、リスナーの生活などまで考えて番組内容を決定していることを知り、学生は日常生活を多角的な視点でとらえることの重要性や、全ての年代に対してわかりやすく言葉を伝えることの難しさなどを感じることができたようです。本学ではそのような気づきあるインターンを重視し、今回のように学生が積極的に動いて成果を出す、そんなプログラムが増えることを期待しています。

○フォトシティさがみはら子ども写真教室プロモーション映像制作（受託事業）

「フォトシティさがみはら2006」の関連事業として実施されている「子ども写真教室」のプロモーション映像を制作しました。

【発注者】相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら実行委員会

【参加大学】相模女子大学、女子美術大学

～相模女子大学学芸学部人間社会学科専任講師 橋場利幸氏～

地域の小学校や市民ボランティアのみなさんとの交流、豊かな自然とのふれあい、社会的責任を伴った仕事のきびしさと楽しさ。プロジェクトを通して、私たちはさまざまなことを学びました。「人間は自分一人だけで生きているのではない、社会の中で生かされているのだ」ということを、あらためて教えていただけたと思います。学生たちにとっても社会人へのよい準備となりました。今回のメディア制作が、人間社会の共通善に奉仕するものであってほしいと願っております。

～女子美術大学 芸術学部メディアアート学科教授 浅野正博氏～

「フォトシティさがみはら」のプロジェクトに映像の授業の一環として参加させていただくことにより、学生の撮影対象を見る眼が養われ、撮られる側になって考えることができるようになっていきました。また大学が地域のプロジェクトに参加することにより大学内では得難い視点や環境、刺激を受けることができ物事を捉えて行く上で、広い視野を持つ事が可能になると思っております。

◆大学と地域の連携に関する研究活動

「大学と地域の連携のあり方に関する研究成果」をまとめました。

（⇒詳細については研究会ホームページをご覧ください）

【「さがまち」編集後記】

【参加した学生のみなさん】

青山学院大学 淺見友香・今崎宏美・澤木一真・武蔵由佳　**相模女子大学** 高橋理恵　**女子美術大学** 内田美香　**玉川大学** 大久保理歌　**多摩美術大学** 大塚晃生・堀之内毅　**和光大学** 渡辺久美子

【学生のみなさんからの感想】

ボランティアの体験取材をしたり、みんなでお菓子を食べながら楽しく編集会議をしたり、それぞれが貴重な経験で素敵な思い出です（淺見）／町田在住歴2年の私にとって新発見の連続だった「さがまち」。活動ではチームワーク・コミュニケーション・愛情の大切さを学びました。素敵な「さがまち」住民とメンバーに巡り合わせてくれた「さがまち」本当にありがとう♪（今崎）／前取材、取材、写真撮影など普段の生活では体験できないような貴重な体験ができて良かったと思います。特に役立つような生活情報ではないかもしれませんが、日々の生活の中で心が癒になれるような紙面であれば幸いです（内田）／取材先の地域の人たちがとても気さくな方々で、町田市・相模原市のことがもっと好きになりました♪「さがまち」に参加して、いろんな年代の熱意ある人たちとの出会いが、私にとって良い刺激になったと思います☆（大久保）／「さがまち」で仕事をしていて気づいたことは、自分の住んでいる町がこれほどまでに魅力を持っていたということです。僕は今後視野を広げていく上で自分の町をもっと知っていきたいと思いました（大塚）／最初は軽い気持ちで始めたこの「さがまち」も、取材や編集作業を通じていろいろな物を吸収できたと思います。今ここにこの数カ月間の一つの結果として「さがまち」を残せたことをとてもうれしく思います…ビバ「さがまち」！（澤木）／「情報紙を学生が発行!?」「さがまち」の企画に驚きました。主に大学生が制作するということで、編集作業に興味があった私は「取材された記事が、こう仕上がっていくのか」という経験ができたのでうれしいです（高橋）／今回初めて知的障がいを持った子どもたちのスポーツ大会を撮らせていただきました。子どもたちから笑顔や元気に障がいの壁など無いことを教えてもらいました。貴重な経験を有難うございました（堀之内）／「さがまち」を通じて『相模原・町田のいろんなことを知れた、いろんな人と出会えた、仲良しな友達が出来た』ことが何よりの収穫です。作業は、いろんな場所と人に出会えた「取材」が一番楽しかったです！貴重な機会をくださった方々に、心から感謝しています。ありがとうございました!!（武蔵）／少しでも「さがまち」に携わることができうれしかったです。企画して会議して取材交渉して取材して執筆してレイアウトして…とても魅力的なことにふれることができました（渡辺）／

▲「さがまち」編集作業

読者プレゼント

【プレゼントの紹介】

「@CAFE SAGAMACHI」の本日のお客様、三浦しをんさんの第135回直木賞作「まほろ駅前多田便利軒」（文藝春秋社刊）を抽選で10名様にプレゼントします。しをんさんの愛情を感じてください！

【応募方法】

ハガキに住所、氏名、年齢と「さがまち」に対するご意見・ご感想を記入の上、下記のあて先までご応募ください。なお、当選者の発表は発送をもって替えさせていただきます。

〒229-1199

相模原市西橋本5-2-1 橋本郵便局私書箱45号

相模原・町田大学地域連携方策研究会プレゼント係

締切：2007年6月30日（当日消印有効）

※お預かりした個人情報は、プレゼント発送以外には使用しません。

2007年4月、相模原・町田大学地域コンソーシアムが誕生します

相模原・町田大学地域連携方策研究会は、3年間にわたる研究活動の成果を活かして、大学と地域の連携協働をより一層推進するための実行組織「相模原・町田大学地域コンソーシアム」として生まれ変わります。誕生するコンソーシアムは、「魅力あふれる地域社会の創造」を基本理念に、研究会事業として培ってきた多彩な大学地域連携プロジェクトを継続し、さらに発展させていく予定です。

大学と地域を結ぶ情報紙「さがまち」

2007年3月

発行：相模原・町田大学地域連携方策研究会

（相模原・町田大学地域コンソーシアム）

URL：http://www.jouhou.org

E-mail：info@jouhou.org